

牛の壁画が示すサハラは かつて緑あふれる豊かな地

アフリカの北部は、サハラ（アラビア語で荒れ果てた地）と呼ばれ、人が住みにくい地であるが、かつては緑豊かな生命に満ちあふれた土地であったという。それほど古い話ではないらしい。

ちよつと信じがたい話だが、事実なのだ。

今とは逆に世界でも有数の人口密集地帯であり、豊かな文明を誇った地であった。

それが証拠に、サハラでは動植物の化石や石器がいたるところで発見される。

しかし、それ以上にはつきり示しているのがサハラの山岳地帯に残されている数多くの岩壁画である。

その中でもアルジェリア東南部のタッシリ・ナジェールに残されたものは量、質ともに群を抜いている。

一九三三年、フランス軍サハラ駱駝部隊ラクダのブルナン中尉は不思議な絵を見つけた。それは現在のサハラでは考えられない、ゾウ、キリン、レイヨウ、ウシなどを写しとったものだった。

ブルナン中尉は驚いてパリに知らせた。パリからはアンリ・ロートら四人の考古学者が派遣された。このときから本格的な調査が始まった。



ロートは岩壁画を四つの時代に分類した。①羚羊の時代（新石器時代初期？）②牛の時代（新石器時代）③馬の時代（先史時代）④駱駝の時代（西暦紀元初期）。

この牛の時代（前五〇〇〇〜前一五〇〇）を代表する絵画がセファールという谷にある。

牛を飼う人々、首輪をつけ放牧されている牛、牛の乳をしぼる子供など、牛の動きを単純な線ながら正確に描いている。

これらの絵を描いた人たちが牛と深いつながりを持っていた様子がはつきりわかる。

今から五千年以上も前に人々が多くの牛とともに暮らしていたということは、当時のサハラは緑に覆われていたことを確かに証明しているのだ。